



・市役所に興味があるけど職場の雰囲気
が分からないから不安…。

・市役所って窓口業務以外にどんな仕事
してるんだろう…？

——そんなあなたに読んでいただきたい。

先輩職員×後輩職員

Cross Talk



市役所って、職員同士の会話もお堅いの…？
外からは分からないだけに、意外と気にな
る職員同士のこと。せっかくだから先輩後輩
ペアにいろいろ聞いてみました。お互いのこ
と、どう思っていますか？

No.1 交通企画・モノレール推進課 竹澤 賢治さん × 長濱 愛里さん

入庁11年目×入庁1年目のペア。右も左も分からない…そんなとき、係長は？

No.2 課税課 荒畑 めぐみさん × 野村 知世さん

入庁5年目×入庁2年目のペア。若手職員の多い課、先輩後輩ってどんな関係？

No.3 道路下水道課 佐藤 誠さん × 田中 一樹さん

入庁5年目×入庁3年目のペア。仕事での接点は実は少ないという2人ですが…？

物事を総合的にみるということ

交通企画・モノレール推進課

先輩：竹澤 賢治さん（入庁 11 年目） × 後輩：長濱 愛里さん（入庁 1 年目）

行政ならではのルール

竹澤： 入庁して3か月が過ぎたけど、調子はつかめてきました？

長濱： 少しずつ慣れてきました。でも、まだ戸惑うことも多いです。

竹澤： 今は大変だけど、基本ルールを覚えてしまえば、異なる分野の仕事を担当したときも「なんとなくこうなんじゃないか」という感覚が身に付いてくるので、少しずつ楽になってくると思います。長濱さんは聞いたことをメモして覚えようとしたり、仕事をなるべく早く処理しようとしたりする姿勢があるから大丈夫じゃないかな。

長濱： ありがとうございます。今は隣同士の席で、私が困っているとすぐに声をかけてくださるので安心して仕事ができます。私が電話で相手の方にきちんと伝えきれていないと、「こう伝えたら？」ってメモを渡してくださったり、質問をすると仕事の手を止めてでも教えてくださったり。竹澤係長は、他の業務でも下準備をきちんとされるなど、とても丁寧で、一緒に仕事をする人への思いやりを感じます。



竹澤： 私も最初は戸惑いの連続でしたから。市役所は数年単位での異動が基本で、これまで産業観光課、生活福祉課、課税課を経験し、2年前に今の部署に配属になりました。

長濱： どれも全く違う分野ですね。

竹澤： そうなんです。異動の度に新しいことを覚えなければならないけど、担当する分野について必ずしも知識を持っているとは限らない。だから、工作中は同僚や先輩に教えてもらい、家に帰ってからでもひそかに勉強をしていました。大変なことも多いけど、いろいろな仕事を通してさまざまな経験ができるのは市役所で働く醍醐味かなと。

長濱： やりがいがありそうです。

竹澤： ちなみに、交通企画・モノレール推進課はもともと希望していた部署でした？

長濱： いいえ、むしろ意外でした。今は多摩都市モノレールの市内延伸を推進するPRグッズを担当できて、とても楽しいです。

竹澤： モノレールのイラストが描かれたクリアファイルや付箋、エコバッグなどなど。なかでもマスクは、絵が得意な職員にお願いして描いてもらったモノレールをあしらったもので、人気が高いです。来年は、在庫が少なくなってきたボールペンを新しいデザインで販売できないか、検討しているところです。



長濱： アイデアがあれば、いつでも提案できる環境にあるので、どんどん出せるようになりたいです。

職員はプロデューサーだ！

竹澤： ところで、長濱さんはどうして武蔵村山市の職員になろうと思ったんですか？

長濱： 関西出身で、進学を機に上京しました。知り合いがいたこともあって武蔵村山市に住み始めたのですが、不思議だったのが、市の中心部にどうしてあれだけ広大な空き地があるのだろうということでした。調べたら日産の工場跡地ということがわかり、市の歴史に興味を持つようになりました。職員になる前は、「もっとこうすれば人を呼べるのに、なんで何もしないのだろう」と思うこともありましたが、今はそんなに単純な話ではないことが理解できます。

竹澤： 市役所の仕事は、調整しながら進めていくものがほとんどですからね。大切なのは、様々な意見を総合的に見る目をもつこと。職員はプロデューサーのようなもので、全体を見ながら答えを導き出すスキルが求められます。日々の業務を着実に積み重ねていくことで、判断できることが少しずつ増えてくるのではないのでしょうか。

長濱： 今は自分のことで精一杯ですが、効率よく進める方法や有効性を考えて、提案したことを実行できるようになりたいです。

竹澤： 目に見えない部分でも多くの人の支えがあってこそできる仕事なので、誠実な対応を心がけるといいと思います。ぜひ周りにいい影響を与えられる職員になってください。



PROFILE

竹澤 賢治 (たけざわ・けんじ) (写真左)

平成 24 年入庁。係長。2 歳になる息子との時間に癒やされる 1 児のパパ。子どもの話になると止まらなくなる。自分と仕事には厳しいが、息子には甘い！？

長濱 愛里 (ながはま・あいり) (写真右)

令和 4 年入庁。歌うのが好きで、カラオケでは 90 点台をマーク。年内の 100 点獲得を目指して、日々イメージトレーニングをしている。

「知る」を深める

課税課

先輩：荒畑 めぐみさん（入庁5年目） × 後輩：野村 知世さん（入庁2年目）

知識ゼロからのスタート

荒畑： 私たちがいる課税課って、ちょうど新人職員さんが入る4月が繁忙期なんですよ。最初、大変じゃなかった？

野村： めちゃくちゃ大変でした。言われたことをそのままやるだけでも精一杯。どの時期に何をやるのか、どういう流れでやるものなのか、全くつかめていなかったのが先輩に何度も同じことを聞いてしまって。2年目に入り、なんとなく流れがつかめてきたかなという気はしていますが、次の繁忙期に向けて体力をつけておかないと思っています。



荒畑： わかります。とりあえず言われたことは全部やるんだけど、どこまでやれば終わるんだろうっていう、先が見えない辛さがありますよね。

野村： あるとき突然、繁忙期の終わりがやってきて「抜け出した」って実感します。

荒畑： あまり知られていないかもしれませんが、税制は毎年変わっています。税制改正といっても大きく変わる年もあれば、さほど変わらない年もあります。野村さんが入った年はかなり大幅な改正があったとき。私たちも勉強し直さなければならなかったのが大変でした。でも、大丈夫。入ったばかりで「ここが変わった」なんて言われてもわからないけど、何年か経てば徐々にポイントがわかってくるから。

野村： 早くその域に到達できるようになりたいです。ありがたかったのが、最初の一月くらいは先輩職員が税についての勉強会を開いてくれたこと。扶養のことや税の計算方法、最低限知っておかなければならないことは例題を使ってみっちり指導してくださいました。

荒畑： 課税課にはそういう文化がありますよね。私のときも当時の係長が教えてくださいました。通常業務では、システムに入力すれば自動で計算してくれるので自分で計算する必要はないのですが、計算の流れは知っておいた方がいいからと。

野村： 制度や根拠を知らないとき市民の方に聞かれたときに答えられないし、自分自身も自信をもって対応できないですからね。知識ゼロからのスタートだったので、とてもありがたかったです。

荒畑： 税について勉強しておけば、仕事はもちろん、自分の役にも立つと思っています。

野村： そうなんですよ。私の祖父は医療費が高額で、受けられる控除があったのに申告をしていなかったんです。そのことを伝えたら、確定申告でかなりの還付を受けることができました。自分がそうだったように、市民の方でも税の詳しいことまではわからない人が多いと思うので、がんばって身につけた知識が誰かの役に立ったとき、担当になれてよかったと思いますね。

いかに効率よく仕事を進めるか

荒畑： 野村さんは、新しいこともすぐできるようになって吸収が早いと思う。

野村： 全然そんなことないですよ。窓口で市民の方の対応をするときも、最初は緊張していたので不安が顔に出てしまっていたと思うんです。でも荒畑さんは普段からおおらかで知識もあって、暗い顔をしている私のすぐ横でとても明るく接していらした。市民の方も笑顔で帰っていかれるのを見て、ベテランの風格を感じました。お手本にしたいです。

荒畑： 毎年のように後輩が入ってくるので、教える立場になると意識が変わる部分はあるのかも。でも野村さん、これまで担当者を明確に決めてなかった業務で、きちんと人を充てて進めようってことになって、入った年でいきなり相続に関わる業務の調査隊長みたいになっていませんか？

野村： なりましたね。いろいろな方に教えてもらいながら、なんとか務めました。

荒畑： きちんと結果を残しているからすごい。開拓精神もあって。

野村： 荒畑さんを見習ってエクセルの勉強も始めました。業務でエクセルを使うことが多いので、関数をマスターできれば処理時間を大幅に短縮できます。私は勝手に荒畑さんのことを「課税課のシステムエンジニア」って呼んでいるんですけど。

荒畑： 野村さんがエクセルに手を加えて、使いやすくなったと聞いています。野村さんは誰からの助言も素直に聞いて実行するし、素直でオープンな性格なので、そこはこれからも変えないでほしいと思います。

野村： 年度末にまた繁忙期がやってくるけど、次は楽しめるように…

荒畑： 一緒にがんばりましょう！



PROFILE

荒畑 めぐみ（あらはた・めぐみ）（写真右）

平成30年入庁。課税課在籍歴5年のベテラン。運動不足なのか、エサの食べ過ぎなのか、最近飼い始めたインコが丸くなり始めたのが気になっている。

野村 知世（のむら・ともよ）（写真左）

令和3年入庁。ダンスを踊り、ギターも弾く才色兼備。劇団四季に魅了され、秋に上演が予定されている「美女と野獣」のチケットを手に入れたいと思っている。

失敗を恐れなくていい

道路下水道課

先輩：佐藤 誠さん（入庁5年目） × 後輩：田中 一樹さん（入庁3年目）

職場に飛び交う専門用語

佐藤： このインタビュー、僕らが受けてよかったのかな。田中君は優秀だけど、俺が全部ぶち壊して――。

田中： 気づいたら僕の単独インタビューになっていたりして。

佐藤： そうそう。（笑）同じ道路下水道課にいるけれど、実は業務での接点はあまりないじゃない。僕は道路の工事や設計担当、田中君は下水担当で事務作業が多い。たまに下水の工事もするので多少は接点があるけれど、年間を通してみたら一緒に動くことってあまりないし。

田中： そうですね。でも、道路下水道課っていつも専門用語が飛び交っているので、わからない言葉をすぐに教えてもらえるのはありがたいと思っています。佐藤さんは技師ですから、聞けば何でも返してくれる。とても勉強になります。



佐藤： 確かに専門用語が多いからね。道路工事というなら、クラック（ひび割れ）が発生したら、道路がどれだけ弱っているかを測定するMCI調査をかけた後、FWD調査で舗装構造を解析する。その結果を踏まえて、修繕するアスファルトの厚さや材料を決めていくんだけど…今しゃべりながら結構難しいことをしているって思いました。（笑）

田中： 本当にそうですから。それに、佐藤さんは基本的にフットワークが軽いですね。うちの課って市民から連絡を受けたりして現場に向かうことが多いんですけど、佐藤さん

は自ら手を挙げて出ていかれるじゃないですか。そこはやはり現場に対する責任感の強さなのかなと。それと、武蔵村山市役所の庁舎ってわかりにくいんですよ。何課がどこにあるかわからなくてウロウロされている方をたまに見かけるんですが、そういう時もすかさず「どちらに御用ですか」と声をかけたりしているので。すごいなと思います。

佐藤： あれはね、たまたま私もウロウロしていただけです。同じ動作をしているこの人も迷っているのかなと思って声をかけてみたわけ。

田中： そんなわけないじゃないですか！（笑）

先回りして考えるということ

佐藤： 僕からすると、田中君はとにかく優秀。誰かに何かを聞かれたときにわかりやすく答えるのは、ほとんどの人が心がけていることだと思うんです。でも田中君は、その先のことまで考えているでしょう。一つの疑問が解決しても、きっとまた新たな疑問

が出てくる。そこまで思いを巡らせて答えてあげているんです。相手の身になって考えられる人、周りに対する気配りがすばらしい人なんだと思います。

田中： ありがとうございます。僕はまだ異動をしたことがないのですが、課の中で担当が変わり、自分がやってきた業務をそのまま新人職員が担当することになったんです。だから、伝えられることはできるだけ伝えていこうと思って。僕の場合、前任者が近くにいなかったの、残されたファイルを見ながらやりくりするしかなく、これでいいのかなと不安に思うこともありました。実際、ミスをして業者さんから指摘されたこともありますし。

佐藤： そういふことがあると確かに不安になるね。でも、ミスを引け目に感じる必要はないと思う。失敗から学んだことは絶対に自分の武器になるから。

田中： なるべく自分の仕事以外のことでも答えられるようにしたいと思うんですが、かといって間違えたことを伝えるのはよくないので難しいところですよ。ただ、ある程度周りの仕事も把握できる職員になりたいので、先輩方にいろいろ聞いています。

佐藤： 田中君みたいに、いい意味で壁を感じさせない人は市役所に必要な存在だと思います。やっぱり役所ってまだまだ堅いイメージを持たれることが多いから。もちろんフランクな対応がいいという訳ではないんだけど、市民に最も近い行政という意味では、もう少し柔らかい場をイメージしてもらえようにしたいと個人的には思っています。

田中： そういふ意味では、佐藤さんって最初の印象は怖そうだなと思ったんですけど、話してみたらフレンドリーで何でも話せます。

佐藤： 僕はボケとツッコミだからね。

田中： ボケというより、イジリとツッコミですよ！（笑）



PROFILE

佐藤 誠（さとう・まこと）（写真左）

建設業界で現場作業や監督を務めたのち、平成30年入庁。「市内でレッサーパンダを目撃した」と主張しているが、環境課職員いわく「タヌキです」。

田中 一樹（たなか・かずき）（写真右）

令和2年入庁。スポーツとゲームが好き。コロナ禍で仲間と集まれず、家族で遊ぼうにも人数が足りず、せっかく買ったボードゲームが家でホコリをかぶっているのが悩み。